

群 教 セ	G01 - 04
	令 6.287集
	国語 - 高

自己の文章を客観視し、推敲できる生徒の育成 ——対話型生成AIの活用を通して——

特別研修員 石井 健悟

I 研究テーマ設定の理由

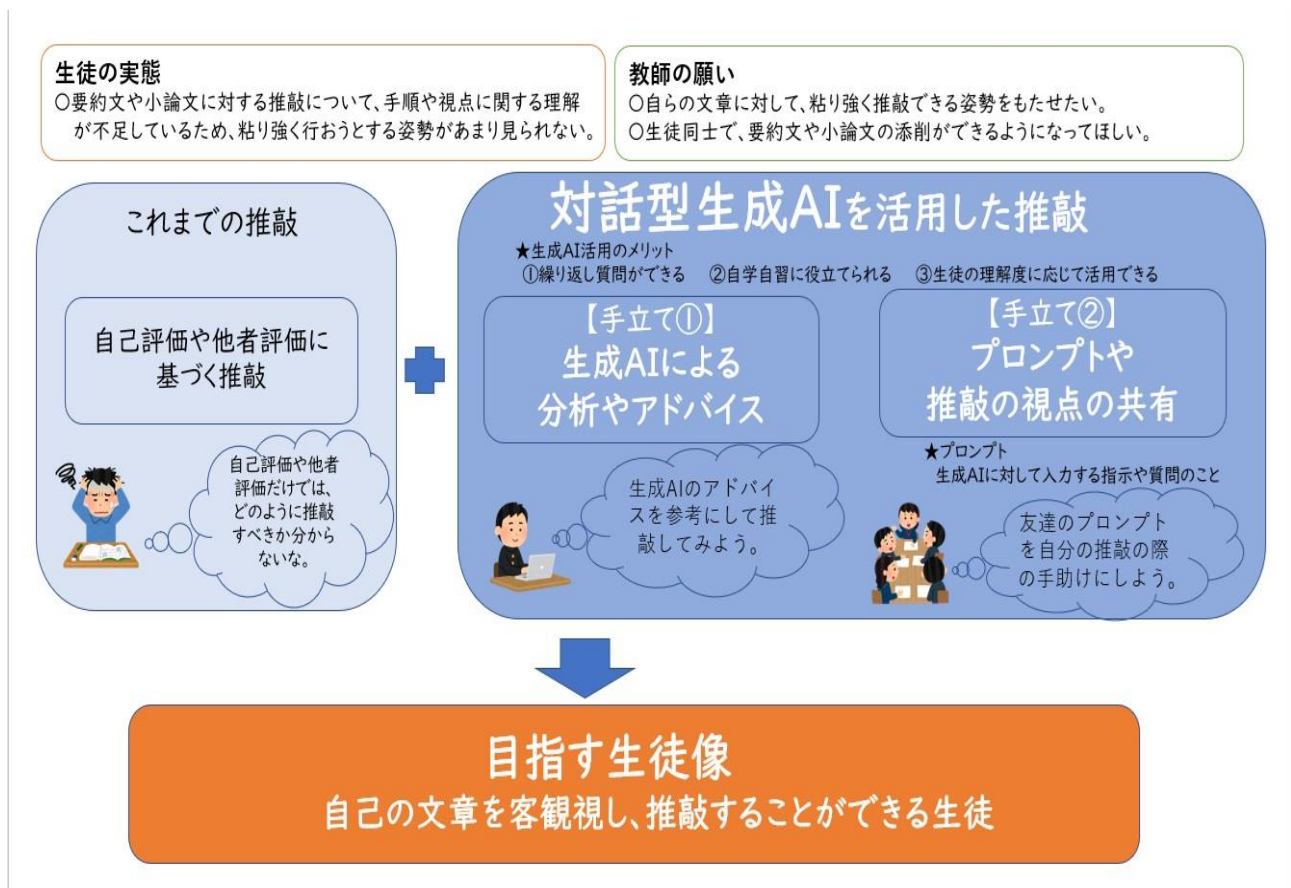
高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説国語編において、科目「現代の国語」では「思考力・判断力・表現力等」の「書くこと」領域が、他の領域よりも多くの単位時間が目安として示されていることから、重要視されていることが分かる。また、言語活動例として挙げられている「意見や考えを論述する活動」、「案内文や通知文などを書いたりする活動」などの活動を充実させるためには、自己の文章を客観視する機会を設けたり、粘り強く推敲したりする作業が非常に重要である。

研究協力校の生徒は、時間を十分に掛ければ与えられた条件に沿って表面的には文章を仕上げることができる者が多い。しかし、自力で根気強く推敲したり、仕上げた成果物に対して、生徒同士で改善点を指摘し合ったり、推敲に結び付けたりすることに課題がある。

そこで、「現代の国語」において、自己の文章を客観視し、推敲できる生徒の育成を目指すこととした。その際、繰り返し質問ができ、自学自習にも役立てられるといったメリットのある対話型生成AIを活用していきたい。今回は、使用年齢制限等を考慮し、ChatGPTを用いた。

II 研究内容

1 研究構想図



2 研究上の手立て

生徒が自己の文章を客観視し、推敲できるようになるために、以下のような手立てを講じた。

手立て1 対話型生成AIによる分析やアドバイス

従来行われている生徒自身による振り返りや生徒同士による相互評価のみでは、自己の文章を客観視し、推敲の視点を獲得することは困難である。そこで、生成AIを活用することにより、生徒同士では得られにくい視点からの分析結果やアドバイスの獲得を目指す。何度でも繰り返し質問することができ、生徒自身の理解度に応じて活用することのできる生成AIの特徴を生かし、粘り強い推敲に結び付ける。

手立て2 プロンプト（生成AIに対して入力する指示や質問）や推敲の視点の共有

生徒それぞれが生成AIを活用した後に、有効だと感じたプロンプトを他者と共有することで、多様な推敲の視点に触れさせ、本單元だけでなく、今後、同様の活動をした際の自己の推敲作業に生かすことができるようにする。

Ⅲ 実践例

1 単元（題材）名 「自己の文章を客観視し、推敲しよう」 （「小論文の推敲」）（第1学年・2学期）

2 本単元（題材）について

これまで「現代の国語」において、教科書本文の要約文や、筆者の考えに対する意見文を作成する言語活動を何度か実践した。その際、生徒によって進捗や精度に大きな差が生じたが、共通して見られた特徴として、自己の文章を根気強く推敲しようとする姿勢が不足していることが挙げられた。その原因として、推敲の仕方や視点が十分に身に付いていないことが考えられる。要約文の場合は、生徒の文章にある程度の統一感が見られるため、教師が推敲の仕方や視点を一斉指導することができるが、意見文や小論文となると内容のばらつきが多く生じ、指導が複雑になった。そこで本単元の学習を通して、生徒自身に自己の文章を客観的に捉え、推敲する技能を身に付けさせたいと考えた。

以上のような考えから、本題材（単元）では以下のような指導計画を構想し実践した。

目 標	(1) 文、話、文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解することができる。 【知識及び技能】	
	(2) 目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめて、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりすることができる。 【思考力、判断力、表現力等】	
	(3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手として自覚をもち言葉を通して他者や社会に関わろうとする。 【学びに向かう力、人間性等】	
評 価 規 準	(1) 文、話、文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解している。 (知識・技能)	
	(2) 「書くこと」において、目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめて、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりしている。 (思考・判断・表現)	
	(3) 積極的に自己の文章を捉え直そうと、学習課題に沿って複数の手段を用いながら小論文を推敲しようとしている。 (主体的に学習に取り組む態度)	
過程	時間	主な学習活動
つかむ	第1時	・小論文について理解を深め、本単元のテーマを設定する。
追究する	第2時	・小論文の構想メモを作成する。

	第3時	・小論文を作成する。
まとめる	第4時	・他者や生成AIによる分析やアドバイスを参考にして小論文を推敲する。
	第5時	・小論文のまとめを行う。

3 授業の実際

本時は全5時間計画の第4時に当たる。本時では、作成した小論文を生徒同士で評価し合ったり、生成AIに分析させたりする活動を通して、自己の文章の客観視と推敲を目指した。

(1) 事前の学習（第1時～第3時）

第1時で、生徒は小論文の書き方や構造など基本的な知識を学んだ。その後、大学入学試験などで出題された小論文のテーマなどについて調べさせ、関心度や理解度に基づいて本単元のテーマを決定した。第2時で小論文作成のための構想メモを作成し、第3時で小論文を仕上げた。構想メモを作る際の情報収集段階においては、必要に応じて生成AIを活用し、小論文を執筆する際には生成AIを頼らず自力で600字指定の小論文を作成し、スプレッドシートに入力した。

(2) 本時の学習（第4時）

はじめに、生徒は前時で仕上げた小論文について本単元の評価規準に基づいて自己評価を行った。その後、他者による評価とアドバイスを通して自己の文章を客観視した（図1）。次に、生成AIに今回の評価規準で分析するプロンプトを入力し、その結果やコメントを参考にして推敲を進めた（図2）。ここでは生成AIを繰り返し活用し、粘り強く推敲しようとする様子が見られた。推敲後は、再度自己評価と他者評価を行い、自己の文章を改めて客観視し分析した。

自己評価①		AIによる分析①
①	B	・具体例やデータを増やす ・地方の交通インフラに触れる
②	A	
他者評価①		他者によるアドバイスなど①
①	B	・説得力に欠ける気がする
②	B	

図1 自己評価、他者評価とアドバイス

総合評価
82点/100点
コメント:
文章は分かりやすく、主張も明確で、多様な視点を取り入れた点が評価できます。ただし、具体例やデータを加えることでさらに説得力が増し、読者への訴求力が高まるでしょう。また、高齢者が免許を返納する際の課題（地方の交通インフラ不足など）についても具体的に触れると、さらにバランスの良い論文になります。

図2 生成AIによる分析結果とコメント

(3) 事後の学習（第5時）

生徒は推敲時に役立ったプロンプトを共有することによって、他者の推敲の視点も理解することができた（図3）。生徒の会話からは「自己の主張と反対の立場についての具体性」など内容に関するものから、「反対の立場を文章のどこに入れ込めば伝わりやすい文章になるのか」といった構成に関するものまで、多様な推敲の視点を得られた（図4）。また、一連の活動を通して、自己の文章を客観視し、推敲するために生成AIを活用することのメリットやデメリットを理解し、今後に生かすビジョンをもつことができた。



図3 プロンプトを共有する様子

S1:	反対意見の具体例を聞くためのプロンプトを入力している人があるね。
S2:	なるほど。反対意見について具体性を増すことで、自分の主張の説得力も高めることができるのか。自分の書いた反対意見も見直してみよう。
S3:	ただ、反対意見を増やし過ぎると自分の主張の妨げになる場合もあるから注意が必要だね。自分の主張と反対意見をどのように並べたら伝わりやすくなるのか、構成について指摘するプロンプトを入力するのもよいと思う。

図4 プロンプトを共有した際の生徒の会話

4 考察

手立て1に挙げた生成AIによる分析やアドバイスに関して、「他者評価では得られなかった視点でアドバイスがもらえた」「自身の小論文の修正すべき箇所を的確に指摘してもらえた」といった肯定的な振り返りが多数見られた。また、約85%の生徒が本単元における一連の活動が推敲の視点の獲得につながったと回答している（V 資料 図2）。このことから、生成AIを活用することは、自己の文章を客観視し、推敲するための有効な手立てであると言える。一方で、どのようなプロンプトを入力したらよいか分からない生徒や、得られた分析結果やアドバイスをどのように活用すべきかが分からずに手が止まってしまった生徒も数名いた。そのため、生徒の理解度に応じて、生成AIを活用する方法について個別指導する必要があると感じた。なお、手立て1については、生成AIを繰り返し活用することでプロンプトの精度が高まり、自分の推敲により役立つような質の高い分析結果やアドバイスが獲得できると考えられたため、一度だけではなく継続して活用することが重要であると考えた。

手立て2に関しては、他者の入力したプロンプトの共有により、これまで自分には無かった推敲の視点や手立てを獲得することができ、本単元内だけでなく、今後、同様の言語活動をした際に生かそうとする前向きな姿勢が見られた。プロンプトの精度や具体性を高めようとする作業は、自己の文章をより正確かつ多角的に客観視することや粘り強い推敲につながると考えられる。また、今回は手立て1から手立て2という手順で活動を行ったが、次回以降は手立ての順番を逆にして活動を行うことも有効だと感じた。手順を逆にすることで、早い段階で精度の高いプロンプトを入力できるようになり、よりの確かな分析結果につながると考えられる。この手立て1・2の往還を通して、推敲の質が高まっていくと予想される。

ただし、この一連の活動を通した生徒の振り返りの中に、「AIの回答を鵜呑みにしないように注意して活用する」といった記述が複数見られたように、自力で作成し推敲することを基本姿勢とし、あくまで補助的な要素として生成AIを活用するということを生徒に徹底させることが重要であると感じた。

IV 研究のまとめ

1 成果

生成AIを活用することにより、他者評価では獲得することのできなかった分析結果や推敲の視点を得ることができた。推敲の視点が獲得できたことによって、スムーズに推敲へ取り組める生徒が多かった。授業を通して繰り返し生成AIと対話をし、粘り強く推敲しようとする中で、意識的に自己の文章を客観視しようとする姿勢が培われた。

また、推敲の際に使用したプロンプトの共有により、他者の推敲の視点を知ることができ、今後の推敲の手立てや見通しをもつことができた。

2 課題

推敲におけるやりとりの全てを見取ることができる仕組みの構築や、自宅学習における有効的な活用方法の模索をしたい。

V 資料

[illegible]

図1 推敲前の文章（上）と推敲後の文章（下）

一連の活動（①自己評価と他者評価（1回目）⇒②生成AIを活用した推敲⇒③自己評価や他者評価（2回目））などを通して、推敲の視点（自分の文章をさらに良くするためのポイント）が獲得できたと思いますか？

27 件の回答

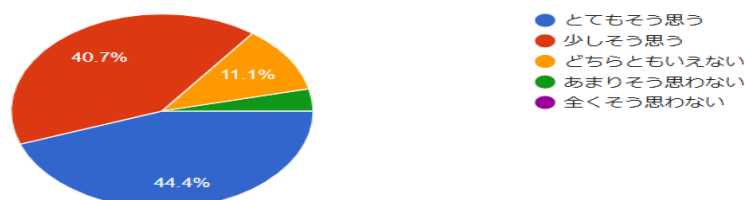


図2 一連の活動に関するアンケート結果

本報告書に掲載されている商品又はサービスなどの名称は、各社の商標又は登録商標です。

Google、Googleスプレッドシートは、Google LLCの商標又は登録商標です。

ChatGPTは、OpenAI Inc. の商標又は登録商標です。

なお、本文中には™ マーク、® マークは明記していません。